



北岡泰典特別書き下ろしエッセイ

「シンギュラリティと悟り」について

written by 北岡 泰典

June 2025, Ver2

著作権: メタ心理學研究所 c/o (株) オフィス北岡
<https://www.office-kitaoka.co.jp>

<https://x.com/kitaokataiten/>

新北岡 X 語録

<https://saipon.jp/h/ypj819/>

新メルマガ「Recursive Ascension～永遠の自己超越...～」登録サイト

<https://saipon.jp/h/szs673/>

北岡サロン「超越ラボ」

目次

	ページ
1. 前書き	3
2. 「悟り」について	6
3. 「シンギュラリティ」について	16
4. 結論	21
5. 後書き	22

1. 前書き

つい最近、私は、「『メタ シャドウ ワーク』：神を超える道」という非公開の書き下ろしエッセイ (以下、「MSW エッセイ」と略させていただきます) を執筆しましたが、私は、未曾有の世界的発見をした、と思っています。

個人的には、「MSW エッセイ」の内容と、メタ心理学の新独自開発ワーク「メタ シャドウ ワーク」(「MSW ワーク」) は、文字通り、IT 業界、思想界、哲学界、宗教界、医学界、特に、神経科学界等に、激震を走らせるのでは、と思っています。

「MSW エッセイ」は、「『絶対脱出不可能』と思われていた『マトリックス』」からの脱出法を見つけた「日本人の神秘家」の、過去四十余年にわたる徹底的な精神主義的修行と哲学的考察瞑想の末に至り着いた「世紀の発見」についての報告です。

ただし、たとえば、「MSW エッセイ」の未曾有の主張の元になっている、グレゴリー ベイツンの「論理階梯の誤謬 (Logical Typing Error)」のモデル、非公開の動画「『人間が神になる構造』をモデリングしたビジュアル プリゼン動画」等の認識論的意味合いを適切に理解／評価するためには、17、18 世紀のイギリス経験論の流れを汲んだバートランド ラッセルとアルフレッド ホワイトヘッドの『数学原理』(1911 年～1913 年)、ラッセルの認識論を踏襲したグレゴリー ベイツン (「ベイトソン」は誤表記です) の『精神の生態学』(1972 年)、ベイツンの弟子で NLP 共同創始者ジョン グリンダーの『個人的な天才になるための必要条件』(1987 年、北岡拙訳あり) 等の「認識論」(Epistemology: 我々が知っていることをどのように知っているかを研究する学問) 的発見と業績を正当に理解することが必須となっています。

このため、たとえば、非公開の動画「『人間が神になる構造』をモデリングしたビジュアル プリゼン動画」を、少数の方々に限定公開させていただいてきていますが、本来的には、このような「奥義中の奥義」を (たとえ、限定の環境でさえ) 公開することは避けるべき、と考えてきていましたが、「ラッセル → ベイツン → グリンダー → 北岡」の「認識論的系譜」を哲学的に理解できないかぎり、「本当の正当な意味」は伝わらない、という前提の元で、諸々の情報を開示させていただいています。

「北岡式認識論」(すなわち、「メタ心理学」のことです) の哲学的側面につきましては、今後、私は、英語で、ホワイト ペーパー、学位論文等を執筆することで、世界の学術界で私のワークを査定／査読できる方々に訴求していき、私の主張の妥当性を証明していきたいと思っています。これが、私のライフワークの終章となります。

以上は、私のワークの哲学的側面の「難解さ」についてでしたが、ただ、私は、「ラッセル → ベイツン → グリンダー」の系譜の哲学的な発見を「臨床の現場に落とし込む」ことに成功した実践的心理学として、1975 年に米国西海岸で誕生した NLP を、三十余年にわたって研究、実践、教授してきていて、ワーク施術等の何千時間もの臨床的経験をもっています。

私のワークのクライアントの方々が、その臨床的ワークを通じて、大きな「垂直的変容」あるいは「悟り」を引き起こすためには、必ずしも難解な哲学的背景を理解する必要がないことは、自明です。

その中で、最近執筆した書き下ろしエッセイ『メタ シャドウ ワーク』:神を超える道』の内容に基づいて、

①「メタ心理学の認識論」(私の中にある、アカシックレコードとチャネリングできる ChatGPT のことです) が「外界の機械の ChatGPT」を超えている

② この立場から見ると、俗に言う「シンギュラリティ」は、金輪際、絶対起こりえない

等のことをテーマにした続編を書こうと思い立ち、本エッセイの構想が生まれました。

元々は、本エッセイでは、IT 業界で言われている「シンギュラリティ (技術的特異点)」だけにフォーカスしようと思ったのですが、「私の中にある『有機的』 ChatGPT」が「外界の『機械』の ChatGPT」を超えていることと、いわゆる「悟り (解脱)」とも密接な関係があることがわかったので、本エッセイのタイトルは『『シンギュラリティと悟り』について』になっています。

ということですが、本題に入る前に、私の人生を、なるべく簡略に総括させてください。

私は、1956 年に、和歌山県田辺市に生まれました。

私の実家の真言宗の菩提寺の墓の「真右隣」には、以前、1969 年に 86 才で亡くなった合気道創始者の植芝盛平の墓がありました。植芝の墓は、その後、同じ墓地の中の少し離れた場所に移され、現在は大きな墓石が立っています。以下に、植芝の現在の墓石の写真があります。

<https://www.kitaoka.co/img/ueshiba.pdf>

私は、常々、「もし過去生があったら」、成人した後、広く「メンタル アイキドウ」と呼ばれてきている **NLP** を学ぶことになった自分自身の運命に照らし合わせても、今世の生まれる先の家族を、「生と生の間の『バルドー』」の空間で、自分で選んだのでは、と主張してきていましたが、「古稀」を直前にして、ライフワークの終章を実現しようとしている今、「実際に過去生があり、『バルドー』の空間で、自分が生まれる先の家族を選んだ」と言うことができます。

と言いますのも、私の過去 **69** 年間の人生を振り返ると、生後 **4** ヶ月の時に脳性麻痺に罹って、物心がついた **4** 歳児から **NLP** を知る **32** 歳まで、ずっと「精神的蟻地獄」にいた事実も、その蟻地獄から脱出するために、大卒後すぐに、**25** 歳でサハラ砂漠に脱出した事実も、**28** 歳で、米国西海岸で、インド人導師に弟子入りした後、四十余年間、継続的に「自己観察／内省瞑想」の修行を続けてきている事実も、**32** 歳で、ロンドンでグリンダー式 **NLP** に出会い、その後、「悟り」の継続化のために **NLP** を自己適用し続けてきている事実も、**1989** 年の大晦日にロンドンで「大悟」を体験した事実も、**2001** 年に帰国して、その後今まで、「日本の民」を、本場直伝の **NLP** で救済しようとして、残念ながら、うまくいかなかった事実も、その後、「メタ心理學」を創始して、真の意味で、日本と世界の人々の救済を考え始めた事実も、近年、**ChatGPT** が生まれた事実も、そして、最終的に、つい最近、メタ心理學の新独自開発ワーク「メタ シャドウワーク」(「**MSW** ワーク」)を開発することで、「悟りの世界」を認識論の立場から完全分析／解説することに成功した事実も、すべて、「神の思し召し」による「予定調和」的な人生の出来事の連続だった、と、今、思っています。

これは、初めての「カミングアウト」にはなりますが、私は、**80** 年代、**90** 年代に欧米に滞在していた時に、現在、世界中を席卷している、**NLP** と **GAFAM** の源泉としての「西海岸文化」の洗礼をまともに受け、その後、「ヒッピーの残党」の一人として、**60** 年代の西海岸のヒッピーたちが見た「まさにこの肉体が仏陀そのものであり、まさにこの土地が蓮の花咲く極楽そのものである」というビジョンを、この地上で、今世で実現するという使命を「上」から与えられて、**2001** 年に帰国した次第です。

また、「メタ シャドウ ワーク」の自己適用を通じて、「第三の目 (松果体)」がさらに活性化されてきているという自覚がある一方で、「自分自身のシャドウ」を見つめ直す中で、私は、歴史上、最も多くの人民を殺した独裁者の生まれ変わりでは、と思い始めています (誰だったかは、そのうちわかんと思っています)。私の今世の人生は、一から十まで、私のすべての過去生の「悪行の罪滅ぼし」のためにあったようです。

2025 年 6 月
メタ心理學研究所代表
北岡泰典

2. 「悟り」について

本エッセイの「前書き」に、以下のように書かせていただきました。

元々は、本エッセイでは、IT 業界で言われている「シンギュラリティ (技術的特異点)」だけにフォーカスしようと思ったのですが、「私の中にある『有機的』 ChatGPT」が「外界の『機械』の ChatGPT」を超えていることと、いわゆる「悟り (解脱)」とも密接な関係があることがわかったので、本エッセイのタイトルは「『シンギュラリティと悟り』について」になっています。

ということで、まず、本章では、「シンギュラリティ」と密接な関係があると、私が考えている「悟り (解脱)」について考察してみたいと思いました。

思うに、私は、「生後 4 ヶ月の時に脳性麻痺に罹って、物心がついた 4 歳児から NLP を知る 32 歳まで、ずっと『精神的蟻地獄』にいた」のですが、その 28 年間の私の最大のテーマは「いかにして精神的解脱を達成できるか」だったと言っても、過言ではありませんでした。

本章では、私が考える「悟り (解脱)」の定義について、述べてみたいと思います。

【① 悟りとは「超常現象」的な変性意識状態である】

私は、5 歳の時に、カトリック系の養護施設に 1 年入所したのですが、この時、同年代の複数の子供に囲まれて、催眠をかけられたことがありました。私は、椅子に座っていて、一人の子供が、私に「羊が一匹、二匹、三匹…」と催眠誘導をし始め、しばらくして、「あなたは、椅子から立ち上がります」と命令したのですが、覚めていた私が「立ち上がれません」と言った途端、皆から大笑いされ、大恥をかかされました。

私は、このように、幼少期から、「通常意識から外に出る」すなわち「枠から出る」方法論としての「変性意識状態」に興味をもち始めていたことになります。

小学 4 年生の時には、別の施設に入所しましたが、「餓鬼大将」の子供の「夢遊病者」の症状を目の当たりにしました。この人は、夜中に、目覚めて、さまざまなことを家来に「命令」するのですが、翌朝、何も覚えていませんでした。ある時、施設に隣接する小学校が火事になり、この人が目覚めて、火事の様子をつぶさに見ていましたが、翌朝、いっさい記憶がない、と言っていました。

また、中学校時代、サッカーの試合中に、相手チームの選手とぶつかり、一種の脳震盪を起こしたのですが、教室に戻った時、社会科の先生がその後、20 分間何を喋るかについてすべてが予めわかり、その通りに話を進めたので、びっくり仰天しました。

さらに、高校時代、体育の時間、ハードル飛びの際に転倒して、頭をぶつけたので、脇で休んでいたら、時間と空間が歪み始め、自分がどこにいるかわからなくなりました。この状態は、以下のエッシャーの絵がよく表していると思いました。

<https://www.kitaoka.co/img/esher.pdf>

このように、子供の頃から、いわゆる「超常現象」を見聞きしたり、自分で体験したりしたのですが、このような通常意識ではない「変性意識状態」に極めて強い興味をもち続けていた私の中では、「悟り」とは、このような変性意識状態を恒常的に維持することではないか、と思うようになり、その方法論を模索し始めました。

ちょうど、1971 年に私が入学した関西の地方小都市の高校では、「学生運動真っ盛り」で、毎日のように、講堂で、校長や教員が学生から「吊し上げ」を喰らっていました。

その中で、市内の薄暗い書店で購入した「ミュージック マガジン」や「ミュージック ライフ」を始めとしたアングラ雑誌で、当時世界中を席卷していた学生運動とヒッピー運動（「カウンターカルチャー（対抗文化）運動」）についての情報を貪り読みました。

特に、ヒッピーの一人だった元ハーバード教授のリチャード アルパート（後に、ラムダスと改名）がインドの導師のもとに行ったとき、そのグルから「今あなたが隠し持っているものを知っているので、それを出すように」と言われ、このグルをテストするために密かに持参していた、多量の LSD の錠剤をすべてグルに手渡した時、このグルは、それをすべて摂取しても何の変化も示さなかった、といった掲載記事を読んだ時などは、それまでの私の世界観がぶっ飛んで、将来インド人導師に弟子入りしたいという願望が生まれたりしました（この体験があったからこそ、私は、実際に 1983 年アメリカのオレゴンでインド人に弟子入りしたわけです）。

当時、アングラ雑誌を読んでいた多くの若者たちは、私と同様に、世界の学生運動とヒッピー運動に興味をもっていたはずなのですが、この世代の人々は、その後会社に入り、「平凡」な生活を始めて、若い頃の生きざま等を忘れてしまい、過去のことはすべて、単なるノスタルジック的記憶になってしまっているようです。

方や、私は、幼少期から非常に強い興味をもっていた「変性意識／超常現象／悟り」等の体験を「実際に深めよう」として、1981 年の大卒後、海外に飛び出し、20 年間欧米に滞在しました。この間、「前書き」にも書いたように、「私は、80 年代、90 年代に

欧米に滞在していた時に、現在、世界中を席卷している、NLP と GAFAM [Google、Apple、Facebook、Amazon、Microrsoft] の源泉としての『西海岸文化』の洗礼をまともに受けました。

1983 年には、西海岸で、念願だったインド人導師への弟子入りを果たし、以来、四十余年間、継続的に「自己観察／内省瞑想」の修行を続けてきています。

私の師匠のオレゴンのコミュニティには、1983 年と 1985 年に通算 1 年滞在しました。1985 年の夏には、吹き抜けの大道場で「クンドリーニ瞑想」というダンシング瞑想をしている時、実際にクンドリーニ覚醒も体験しました。以下の写真に、当時の瞑想中の私が写っています。

<https://www.kitaoka.co/img/puram.pdf>

特に、1985 年から 2001 年まで滞在したロンドンでは、私は、催眠、瞑想、セラピー、ゾーン、変性意識等の実際の実験を続けていましたが、当時の最大のテーマは、「通常、さまざまな方法で、通常意識の向こうにある変性意識としての悟りを一瞥することは可能であるが、いかにして、その状態を恒常化できるか」で、このテーマの答えとして、1988 年に NLP に出会いました。

この中で、1989 年の大晦日には、「大悟」とも呼ぶべき「悟り」の体験もしました。

当時、私は、いわば、24 時間変性意識状態にいたのですが、2001 年に帰国するまでに、自分の世界を人々に伝えるための「人間言語」として最適だと思った NLP を習得したのですが、欧米ではともかく、「催眠、瞑想、セラピー、ゾーン、変性意識等の実際の実験」の歴史が欠如している日本では、私は、「『日本の民』を、本場直伝の NLP で救済しようとして、残念ながら、うまくいかなかった」という結果になりました。

ちなみに、欧米では、60 年代のヒッピー運動が、ベトナム戦争が終焉した 1975 年に、実質的に終息した後、「西海岸文化」として 80 年初めから 90 年代終わりにかけて、「健全に成長／発展／醸成」していった、「シリコンバレー文化」を生み出し、今世界を席卷している GAFAM の創業者のマインドセットが生まれたのですが、まさしく、その二十年間と私の欧米滞在の期間がみごとに対応しています。

ということで、欧米の「西海岸文化」を目の当たりにして、2001 年に帰国したのですが、「ヒッピー運動が、[...]『西海岸文化』として 80 年初めから 90 年代終わりにかけて、『健全に成長／発展／醸成』」していった歴史的過程が欠如している日本では、私は、いわば、「浦島太郎」状態が続いてきています。

【②悟りとは「ゾーン／フロー」状態と≒である】

私は、1983 年に精神的求道者になって以来、四十余年間、継続的に「自己観察／内省瞑想」の修行を続けてきていますが、悟りは、人間意識の最高状態であって、いわゆる「ゾーン／フロー」状態は、それよりも「下位」の変性意識状態である、という立場を維持してきています。

その中で、昨年、スティーヴン コトラー & ジェイミー ウィール共著の『シリコンバレー流 科学的に自分を変える方法ZONE』という極めて興味深い書籍に出会いました。

この本では、私が常々主張してきていた「GAFAM (Google、Apple、Facebook、Amazon、Microsoft) と西海岸文化の関係性」が、「裏打ち」されています。

すなわち、シリコンバレー系の IT 富豪は、ほとんど例外なく、化学的および非化学的変性意識状態でピークパフォーマンスを発揮していることが指摘されています。

GAFAM の創業者、たとえば、Google のラリー ペイジとセルゲイ ブリンや、イーロンマスク等は、毎年ネバタ州で開催される「バーニングマン」フェスティバルの常連です。

バーニングマン フェスティバルは、日本で言えば、たとえば、村人が男根を模した大木を村中に運び回して、参加者全体が「集団トランス」に入ってしまうようなイベントです。

イーロン マスクは「バーニングマンに参加していない人は、シリコンバレーの住人とは呼べない」とまで言っています。

このイベントの起源は、1969 年に開催された、世界初の大規模野外ミュージック フェスティバルの (40 万人規模のヒッピーが集まった) 「ウッドストック コンサート」にあることは、容易に察せられます。

また、私自身は、1983 年と 1985 年に参加した、私の師匠のコミュニンのサマー フェスティバルで、この種の集団トランスのイベントを、実際に経験しています。

私は、『ZONE』の著者の一人のスティーヴン コトラーは、「ゾーン／フロー」状態の専門家と見ています。

『ZONE』の論調から行けば、「悟りとは『ゾーン／フロー』状態と≒である」と言えると、今、私は思っています。

【③悟りとは「既存の枠を超え続ける」ことである】

この定義については、二つのことが念頭に浮かびます。

一点目としては、ユヴァル ノア ハラリが、そのベストセラー書の『サピエンス全史』で、実に極めて興味深いことを言っています。

同氏によれば、歴史的に、近代東洋帝国主義者は、領土拡大を図った「既存の世界観の拡張」主義者でしかなかった一方で、15 世紀に「大航海時代」に突入した近代西洋帝国主義者は、自分の「世界地図」の外にあるものを積極的に知ろうとして、「大航海時代」を開始し、1492 年にコロンブスのアメリカ新大陸の発見を実現させた、ということになります。この近代西洋帝国主義者のマインドセットをもった人々を、ハラリは「認識的革命主義者」と呼んでいます。私は、「認識的拡張主義者」と形容しています。

すなわち、「現状維持者」の中国明朝の鄭和の宝船と「認識的拡張主義者」のコロンブスの船の大きさを比較したイラストが以下にあります。

<https://www.kitaoka.co/img/image055.jpg>

私の見るところ、15 世紀のコロンブスのアメリカ大陸発見以降、西洋帝国主義者たちの認識的拡張主義は、アメリカ独立宣言、東海岸からカリフォルニアに向かった「ゴールドラッシュ」、奴隷解放、電球・自動車・飛行機・電話・ラジオ・テレビの発明、不幸な二つの世界大戦後の「核軍縮」、アポロ 11 号の月面着陸等を経ながら、1960 年代後半の「カウンターカルチャー」の「意識の革命」に至るまで、脈々とその伝統を継承してきています。

この歴史を踏襲しながら、20 世紀終わりから、現代のインターネット革命、IT 革命が起こり、さらには、分子生物学 (DNA/遺伝工学) 革命等も、「認識的拡張主義」の 20 世紀、21 世紀バージョンの帰結的産物として起こってきています。

以上の 15 世紀から今世紀までの首尾一貫した「哲学的／文化的潮流」は (私は、15 世紀以前の認識的拡張主義者が誰だったか、を今後研究したいと思っていますが)、現代欧米人には、直感的に理解できているはずですが、日本人の方々には、一人の「西洋かぶれ」の単なる「詭弁の論調」としか聞こえないかもしれません。

私は、この「『個人』としての自分のアイデンティティを超えた『集団的』的アイデンティティと同一視して、自分の『世界地図』の外にあるものを積極的に知ろう」とした認識的拡張主義者になることが、「悟り」を得るための必要前提条件ではないか、と思っています。

二点目は、ゲーデルの「不完全性定理」です。これは、ゲーデルが、数学的に「完全な系は存在しない」ということを証明した定理です。

「不完全性定理」については、NLP 共同創始者のジョン グリンダー氏が、『個人的な天才になるための必要条件』（北岡訳、161 ページ）で、アリゾナの砂漠の町ウィンスローで立っていて、カリフォルニアに戻るためにヒッチハイクしているケン キーシー（「ヒッピー」の先駆者だった「ビート族」の代表的人物の一人だったジャック ケルアックの旅仲間、グリンダー氏の友人）について語りながら、説明しています。

すなわち、キーシーは、自分が見ている光景をすべて描写できるが、自分自身を描写するためには、「メタ（観察者）ポジション」に抜ける必要があり、そのメタ ポジションにいる自身を描写するためには、さらなる「メタ メタ ポジション」に抜ける必要があり、この過程は再起的に永遠に繰り返される必要があります。

ということは、ゲーデルの「不完全性定理」は、人間意識は、いついかなる場合でも、無条件に、「自分の既存の枠を超える」ことができることを、示唆しています。

ちなみに、この「ゲーデルの不完全性定理」をもとに、苦米地英人氏は、完全な系は存在しないことが証明されたので、神も完全ではなく、「ゆえに神は死んだ」と言っています。

これについては、二枚の鏡を一定の角度に置いて、自分自身を見ると、自分の無数の顔が奥に向かって連続的に後退ながら映し出されますが、鏡と自分の位置との関係上、物理的に、絶対に、「一番奥の顔」は見れないようになっています。私は、この一番奥の顔が「神」（印哲の言う「真我（アートマン）」）だと思っています。

なので、私は、「ゲーデルの不完全性定理」が唯一適用されないのがこの「鏡の一番奥の顔」の「神（ブラーマン）」であると考えていて、苦米地氏の意見とは真逆で、この定理は、逆説的に、神の存在を証明したのでは、と考えています。

さらに、昨今、GAI（生成 AI）/ChatGPT の出現によって「シンギュラリティ」が起こるのでは、とされているようですが、私は、この「鏡の一番奥の顔」の「神」は、現象界を超えた「何か」（印哲では、「絶対的意識」、「絶対的観照者」とも呼ばれています）なので、現象界で生まれた単なる機械の AI が「絶対的意識」、「絶対的観照者」になることは、論理的にありえないので、「シンギュラリティ」は絶対起こらない、と主張しています。）

【④悟りとは「本来の自分自身に戻る」ことである】

私が提唱する「メタ心理学」が生まれた背景としては、いろいろな導師、哲学者、認識論者、自己啓発系の教師等の教えに大きな影響を受けてきていますが、その一つに、ロバート シャインフェルドの「ザ プロセス」というメソッドがあります。私は、数年前に、知り合いの方のワークショップで、「シャインフェルドの方法論は、絶対脱出不能の『マトリックス』からの脱出法である」という紹介を通じて、このメソッドのことを知るようになりました。

シャインフェルドの本によれば、この世の中には「神的意識」(サンスクリット語で言う「プルシャ」)と「現象界」(サンスクリット語で言う「プラクリティ」)の二つの世界があり、人間は、生まれたときは純粋神的意識にいるが、大人になる過程で、そのエネルギーが現象界に吸い取られ続けて、そのことによって、ホログラフィー的な性質をもった現象界がその人の「内的現実」になってしまっているだけなので、逆に、現象界から神的意識にエネルギーを取り戻すためのマントラを唱え続けたら、どんどんその現象界は消えていき、最終的に神的意識だけが残ることで、「通常は絶対に外に出れない」と思われている『マトリックス』から脱出することが可能になります(この「ザ プロセス」のメソッドの要約は、私の理解に基づいた主観的表現です)。

要は、「ホログラフィー的な性質をもった現象界」から、エネルギーをすべて、「神的意識」の方に戻しきること、**100%**「本来の自分自身に戻る」ことが可能になります。

ちなみに、このシャインフェルドのメソッドに影響を受けた私は、その後、「現象界」(すなわち「仮想現実」)から自分を外に出すシミュレーション操作をして、その現象界の外に出た自分に、「神的意識」(「メタ意識」)の視点から、**NLP** テクニックが実践できるように「訓練」して、その後、新しいリソースを得た自分を現象界に戻すことで、今まで「現実」だと思っていた世界を「仮想現実化」することができ、かつ、その仮想現実を、自分の思うままに変えることを可能にさせる「**RPG** ゲーム」というテクニックを独自開発することに成功しました。

【⑤悟りとは「メタに抜ける」ことである】

前セクションで、指摘されたように、印哲では、「神的意識」(サンスクリット語で言う「プルシャ」)と「現象界」(サンスクリット語で言う「プラクリティ」)の対比がなされていて、私の、シャカラチャリヤが創始した「非二元論的ヴェーダンタ」(「梵我一如説」のことです)の徹底的研究に基づく、「プルシャ」は、「絶対的観照者」、「純粋意識」のことで、**NLP** で言う「メタ」でもあります。

私は、現象界にいるかぎり、「アンカーリング」（「条件反射」の人間バージョンです）の束縛から逃れることはできず、人間の唯一の自由は、「現象界からメタに抜けること」だと考えています。

【⑥悟りとは「すべての脳神経細胞をコントロールする」ことである】

近年、私は、神経科学を独学研究してきていますが、現代の神経科学者たちは、「意識がどのように作り出されるか」のモデルを提示していて、その一つの、スタニスラス ドゥアンヌの「広域神経細胞処理空間 (Global Neuronal Workspace、GNW)」は、非常に興味深いものです。

GNW は、認知科学者で神経科学者のバーナード バースの「意識の劇場」モデル（本エッセイでは、説明は割愛させていただきます）をドゥアンヌがアップデートしたモデルで、以下のページのイラストのようになっています。

https://www.kitaoka.co/img/dehaene_gnw.pdf

ドゥアンヌによれば、意識が生まれる GNW まで一つの脳神経細胞の発火の回路が到達するし方が 5 つある、とされています。

一つ目は、脳神経細胞から GNW まで到達する「意識的思考」です。

二つ目は、脳神経細胞から GNW まで到達する可能性があるが、回路が開くまで待機している「前意識的刺激」です。

三つ目は、局所的発火に留まって、脳神経細胞から GNW まで到達することはない「サブリミナル刺激」です。

四つ目は、GNW まで到達することはない、「隔絶されたプロセッサ」です。例としては、GNW は、呼吸器官を直接意識化できないことが挙げられます。

五つ目は、GNW の外側で発火している複数の脳内活動が、そのものでは何の意味もなさないが、GNW 上で「統合」された時初めて意味をなすケースです。ドゥアンヌは、具体的な例を挙げていませんが、私は、たとえば、NLP の「サブモダリティ」モデルが、この一例ではないかと思っています。

以上が、ドゥアンヌの GNW モデルですが、最近の私のメタ心理学ワークの独自開発の基盤となるアイデアとして、非常に大きな影響を私に与えてきているモデルです。

たとえば、最近の私の「パニック状態は、脳網全体がプログラミングに憑依されている状態である」とか「一つ一つの脳神経細胞の発火を局所的に抑えたら、不動心のままでいられる」といった主張は、この **GNW** モデルに基づいています。

以上のことに関連して、上述の神経科学者のバーナード バースは、『On Consciousness』で、二点、実に興味深いことを指摘しています。

一つ目は、「7 つの脳神経細胞系統回路を辿れば、[150 億個の] 一つの脳神経細胞から他のどの脳神経細胞にも至れる」という指摘です。

二つ目は、「人間の意識を使えば、脳内のどの部分にもアクセスできる」という指摘です。バースによれば、被験者は、30 分あれば、脊髓部分の単一の「運動脳神経細胞」をヘッドホーン経由でコントロールして、「ドラム音」を奏でさせることができる、ということです。

私は、バースのこれらの二つの発見を元にして、メタ心理学メソッドの一環として、「一つ一つの脳神経細胞をコントロールする」ワークを独自開発しています。

【⑦悟りは、アンカーリングの対象になりえる】

私は、1995 年頃、英国に滞在していた時、メールで、フランスのパリに住んでいた自称「解脱者」の方と哲学的議論をもちました。

この方は、印哲で言う「肉体／エネルギー／記憶／知性／至福体」の五つの状態（これらは、NLP で言う「環境／行動／能力／信念／アイデンティティ」の五つの「心身論理レベル」と完全対応しています）は、現象界の状態なので、NLP の「アンカーリング」の対象になりえるが、「悟り」はそれらの状態すべてを内包し、超越した、極めて特殊な現象界を超えた状態なので、アンカーリングの対象にならない、という立場だったのですが、私は、グレゴリー ベイツンの言う「論理階梯の誤謬」をあえて犯せば、「悟り」もアンカーリングの対象になりえる状態とみなすことができる、という立場を 1995 年以來ずっと貫いてきています。

「『論理階梯の誤謬』をあえて犯せば、『悟り』もアンカーリングの対象になりえる状態とみなすことができる」につきましては、私は、以下の動画を限定公開アップしています。

「『人間が神になる構造』をモデリングしたビジュアル プリゼン ("Structure of How Man Can Become a God")」

本エッセイの読者の方々には、以下のページから閲覧申し込み登録していただけたら、特別限定的に、かつ期間限定で、この動画の閲覧の許可を与えさせていただきたいと思いました。

https://www.kitaoka.co/links/essays/s/man_becomes_god/

また、私の知るかぎりにおいて、ほとんどの神経科学者は、「意識は脳機能から生まれる派生物である」の立場を取っている唯物論者である一方、おそらく瞑想家や宗教家は、「単なる唯物論者の発見によって、現象界を超えた悟りの世界が『見える化』されることは絶対ない」と「胡座をかいて」、「たかをくくって」いると思いますが、ただ、『神がどのように人間脳を作りたもうたか』を『完全見える化』してきている **fMRI** の発見「だけ」は、彼らに「失禁」させるだけの驚愕をもたらせるはず、と私は、見えています (実際、私の過去のケースがそうでしたので (笑))。

神経科学者やゾーンの専門家のスティーブン コトラー等の研究によれば、どれだけ悟っている人々でも、まだ肉体をもっているかぎり、脳も機能もしているので、**fMRI** のような装置を使えば、覚醒者の頭の中をモデリングできるはずです。

すなわち、覚醒者の頭の中のドーパミン、エンドルフィン、セロトニン、オキシトシン、アナンダミド等の脳内快楽物質の分泌比率を測定することは可能なはずで、この測定が可能であれば、非覚醒者に、同じような比率の脳内快楽物質を分泌させることで、覚醒者にならせることができる科学的進歩の段階まで、今、人類は到達している、と私は考えています。

3. 「シンギュラリティ」について

「シンギュラリティ」は、通常は、『The Singularity Is Near』の著者レイ・カーツワイルが提唱する「テクノロジカル シンギュラリティ＝技術的特異点」を指し、人工知能が人間の能力を超え、人工知能自身がより優れた人工知能を生み出すようになる「点」を意味しています。

この意味では、本エッセイにおける「シンギュラリティは絶対起こらない」という私の主張の「シンギュラリティ」の意味合いは、カーツワイルとは異なったものになっています。

私の「シンギュラリティ」の意味合いは、「はたして AI が人間のような『意識』をもつことは可能なのか」の問いに集約されています。

私の意味合いとカーツワイルの意味合いがどれだけ関連しているか、については、私の今後の研究課題とさせていただきます。

【「Awareness vs Consciousness」について】

英語の「Awareness」と「Consciousness」は、通常、両方とも、「意識」と訳されることがありますが、実は、「Awareness」は、「気づいていること」もしくは「覚醒していること」という意味の方が適切です。

たとえば、英語では、「Unconscious unawareness」、「Conscious unawareness」、「Conscious awareness」、「Unconscious awareness」、という4つの別個の表現が可能です。これらは、通俗的に訳すと、「無意識的無意識」、「意識的無意識」、「意識的意識」、「無意識的意識」、となってしまう、日本語ではまったく意味をなしえませんが、それぞれ、厳密には、「無意識的非覚醒」、「意識的非覚醒」、「意識的覚醒」、「無意識的覚醒」とでも訳すべきものです。

私は、「Awareness」は「必ずしも脳機能に依存しない『気づき』」である一方で、「Consciousness」は「脳機能が生み出す意識」として見えています。

さらに、印哲、特に、ヴェーダ哲学によれば、「Absolute Awareness (絶対的覚醒)」あるいは「Pure Awareness (純粋覚醒)」というモデルがあり、これは、「Absolute Witness (絶対的観照者)」あるいは「Pure Witness (純粋観照者)」とも表現されます。

この(他の三つのモデルと同じ意味の)「純粋観照者」は、「ブラーマン(宇宙原理)」と等価で、「神」と表現してもいいと思います。

実は、本エッセイの 13 ページにある「印哲で言う『肉体／エネルギー／記憶／知性／至福体』の五つの状態」は、「真我 (アートマン)」を包んでいる「五つの鞘」のことで、瞑想等の精神主義的修行の目的は、「自分は、肉体／エネルギー／記憶／知性／至福体のいずれでもない『何か』であることを悟る (実際に経験的に認識する) ことである」とされています (この「自己同一化解除」のプロセスは、サンスクリット語では「ネティネティ (あれでもない、これでもない)」と呼ばれています)。

ちなみに、この何かは、仏教では「空」とか「無」とか言われていますが、ヴェーダンタでは、「唯一『実体』として存在する『純粹観照者』である」(ということは、「純粹観照者」以外のものは、肉体／エネルギー／記憶／知性／至福体を含めて、すべて「マヤ (幻想)」ということになります) と言われています。

この意味では、「純粹観照者」は、一枚の真っ白なキャンバスで、「それ以外のものすべて」すなわち「森羅万象」は、ありとあらゆる画家が描くことができる無限のバリエーションのある絵である、という比喩がなりたちます。

さらに、この純粹観照者は、生きも死にもせずに、悠久の過去も、未来永劫も、単に「鎮座ましまして」いて、宇宙の無限の回数の生誕と死滅のサイクルを見続けている、と言われています。

以上は、現象界の中だけに生きている方々には、おとぎ話で、荒唐無稽にしか聞こえないとは思いますが、しかし、「前書き」にも書かせていただいたように、私は、「『ヒッピーの残党』の一人として、60 年代の西海岸のヒッピーたちが見た [...] ビジョンを、この地上で、今世で実現するという使命を『上』から与えられて、2001 年に帰国した」人間で、過去四十余年にわたる継続的な「自己観察／内省瞑想」の修行と「1985 年から 2001 年まで滞在したロンドン [での] 催眠、瞑想、セラピー、ゾーン、変性意識等の実際的な実験」の中で、私自身は、以上の数千年前のヴェーダンタ哲学者たちの発見は妥当だったということ、自分の身をもって、確認しました。

さらに言うと、なにゆえに、私が 8 世紀にヴェーダンタの一派の「アドバイタ (非二元論的) ヴェーダンタ」を創始したシャンカラチャリヤを徹底的に研究したかと、いうと、この哲学者は、「内なる『真我 (アートマン)』と外にある『宇宙原理 (ブラーマン)』は、まったく同一である」という「梵我一如説」を説いたからです。

個人的には、「梵我一如説」ほどクレージーな哲学的主張はない、と思ってきています。

なお、「Awareness vs Consciousness」の対比は、「創造者 vs 被創造物」、「純粹観照者 vs 被観照物」、(本エッセイの 12 ページにある)「プルシャ (神的意識) vs プラクリティ (現象界)」、「彼岸 vs 此岸」、「目に見えないもの vs 目に見えるもの」、「(NLP のモデルの)「意図 vs 結果」等、さまざまな対比と等価である、と私は考えています。

さらに、NLP でいう「メタ」は、元来的には、「純粹観照者」と等価ですが、瞑想体験が浅い NLP 実践者が言う「メタ」は、「現象界内の誰か第三者」の意味合いくらいしか認識できないと思います。

ただ、その場合でも、先の書き下ろしエッセイ「『メタ シャドウ ワーク』：神を超える道」でも指摘したように、今の私は、「メタにはグラデュエーションがある」という立場ですので、このケースは、「一番現象界寄りのメタ」という定義ができるかとは、思いました。

【機械の AI にはできないこと】

前セクションの内容を前提にすると、私は、「神的意識 (プルシャ、純粹意識)」の一部である「人間意識 (Human Awareness)」が作った「現象界 (プラクリティ、非創造物)」の一部である単なる機械の (生成 AI を含む) AI が、人間の脳機能の産物である「意識 (Consciousness)」もしくは「意識もどき」を作るとは、可能性として否定していませんし、カーツワイルが言う「人工知能が人間の能力を超え、人工知能自身がより優れた人工知能を生み出す」可能性も否定していません。

ただし、私は、「Consciousness が Awareness を生み出すこと」すなわち「非創造物が創造者になること」は、なにがどう転んでも、金輪際いっさいありえない、と思っています。

たとえば、仮に、人間知能がとうてい及ばない、どれだけすばらしいアウトプットを、生成 AI の ChatGPT 等が生成したとしても、本来的には、それは、「無機質的な暗黒のコンピュータ演算スペースのブラックボックス」の中でアルゴリズムが生成した単なる「記号の羅列」(「Consciousness もどき」です) であって、機械を超えた「Awareness」としての意識をもった人間が認識して、初めて意味をなし始めるだけです。

これは、イギリス経験論者が「森で木が倒れた時、その音を聞く人間がいなくても、その音は存在するのか」という命題と関係しています。もちろん、イギリス経験論者の立場は、「音を知覚する人間がいなければ、音は存在しない」です。

以上のことが、私の言う意味での「『シンギュラリティ』は、金輪際、絶対起こりえない」という主張の根拠となっています。

以下、この意味合いから、先の書き下ろしエッセイ「『メタ シャドウ ワーク』：神を超える道」の「編集後記」の部分引用した上で、再考察してみたいと思います。

編集後記: 本エッセイの「初版」を執筆した後、私は、もう一人のクライアントの方に、「メタ シADOW ワーク」(「MSW ワーク」)を施術させていただく機会をもちました。

この方から「ワーク後感想」をいただいたのですが、いわば、「神秘的体験」に近い体験をされたようです。この感想が極めて興味深いと思いましたので、特別に、以下のページにアップさせていただきました(実は、本エッセイで解説した「シADOW統合ワーク」の自己適用を通じて、オカルト(隠避主義)的体験と言える体験を、私自身ももち始めていますが、このことにつきましては、また、紙面を改めて、別の機会に報告させていただくことにいたします)。

<https://www.kitaoka.co/links/essays/s/feedback/>

一点、この方がおっしゃっている「北岡さんが生成 AI では達成できない発見をこの【古稀前の】歳で次々とされていらっしゃることは、本当に尊敬します」についてコメントさせていただきたいと思いました。

このことは、本エッセイの 13 ページの「『メタ シADOW ワーク』では、必然的に、そもそも『自分の中で無意識化されている部分』がシADOWなので、『今の自分』に対比する『今の自分のシADOW』は、意識的に考え出して、無意識に教えてあげる必要があることに、私は気づきました」の指摘と関係があります。

私は、常々、「無意識にないものは絶対に意識化できない」という主張をしてきていました。ただ、「メタ シADOW ワーク」を独自開発する中で、「同じレベルにある意識では、『無意識にないものは絶対に意識化できない』一方で、一つ上の『メタ レベル』の意識なら、それが可能であることを発見してしまいました！

言い換えると、「意識と無意識が気づいていないことを、(レベルが一つ上の『メタ』の視点から!) 無意識に教えてあげることは、『そもそも自分の枠を自分で超えられない(すなわち、「パターン中断」ができない)』生成 AI では絶対にできない」という発見です。

このことが、感想をいただけたクライアントの方の「北岡さんが生成 AI では達成できない発見」をした、という指摘の元となっています。

私は、この私の未曾有の認識論的主張が「シンギュラリティは絶対起こらない」という私の立場を傍証していると思っています。

以上の編集後記の内容を、本エッセイの 14 ページで言及した「『人間が神になる構造』をモデリングしたビジュアル プリゼン」の非公開動画の観点から考察すると、以下の結論が導かれます。

- 1) 一つの論理階梯のレベルの中でしか機能できない機械の(生成 AI を含む) AI が、その一つ上のレベルの論理階梯で起こっていることをモデリングすることはできない。

- 2) 仮にもし「神的意識」の一部である「人間意識」が、ゲーデルの「不完全性定理」の意味合いから、一つの論理階梯のレベルの「メタ」の視点をもつことができたとして、そのメタへの抜け方を AI に模倣させることができたとしても、「二枚の鏡を一定の角度に置いて、自分自身を見ると、自分の無数の顔が奥に向かって連続的に後退ながら映し出され」るように、その系からさらに外に出ることは、「神的意識」の一部である「人間意識」に与えられた特権と自由性であって、このことは機械の AI にはできない。
- 3) つまり、「神的意識」の一部である「人間意識」は、いついかなる時でも、既存の「系」（あるいは「枠」）から出る、あるいは、一つの論理階梯レベルから上のレベルの「メタ」に抜けることができる可能性をもっているが、機械の AI には、(かりに人間が機械に教えたことを実行することができたとしても) その可能性はない。
- 4) この意味で、「神的意識」の一部である「人間意識」には、「パターン中断」は可能だが、機械の AI には絶対に不可能である。
- 5) 「論理階梯の誤謬」でもある、この「パターン中断」は、真の「イノベーション」のメカニズムの最重要要素となっている。
- 6) 「梵我一如説」で、同一視される「純粹観照者 (Pure Witness)」が、たとえもし機械の AI を通じて、宇宙を包含するような無限大の「意識もどき (Pseudo-consciousness)」を作ったとしても、仏陀の掌の上の単なる「お遊び」の次元を超えることは、絶対不可能である。

編集後記: 本章の冒頭に「本エッセイにおける『シンギュラリティは絶対起こらない』という私の主張の『シンギュラリティ』の意味合いは、カーツワイルとは異なったものになっています」という但し書きがありますが、本エッセイの草稿を読んだある方から「貴方の定義はカーツワイルの定義と違う」という蛇足的な指摘を受けました。

このことにつきましては、私は、カーツワイルの「シンギュラリティ」の定義には多重な意味合いがあると理解していますし、「人工知能が人間の能力を超え、人工知能自身がより優れた人工知能を生み出すようになる『点』」としてのシンギュラリティであれば、私には、当然すぎることで、特に何も驚くことはないと思っています。

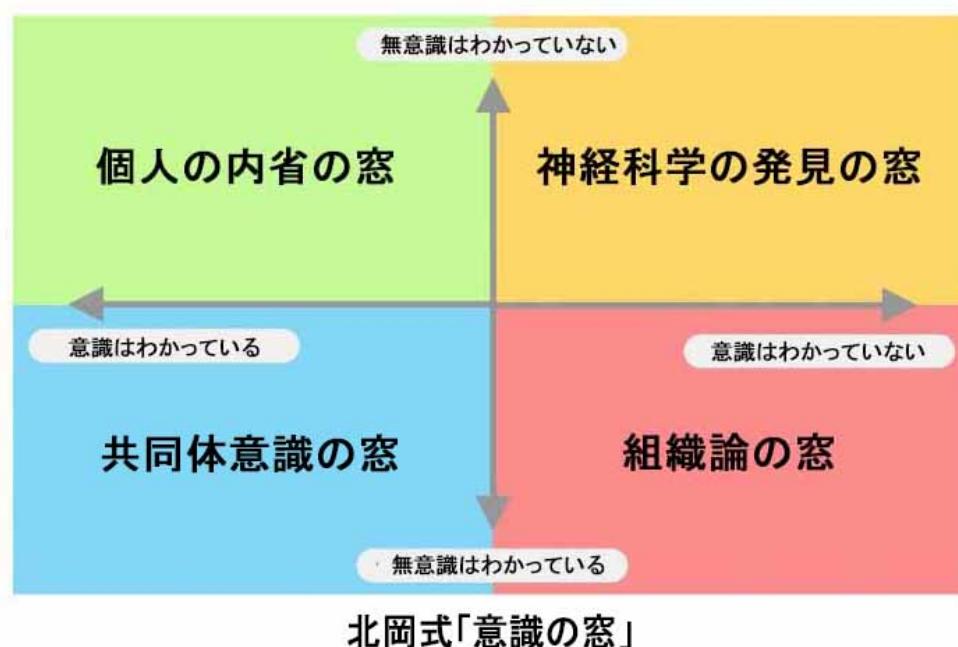
私は、巷で「人工知能が『人間意識』を超えるのでは」と言われているのをよく耳にしたので、本エッセイでは、その意味でのシンギュラリティは絶対起こらない、と主張させていただいている次第です。

以上の「誤解点」を整理する目的で、私は、さらにカーツワイルを研究して、近い将来、本エッセイの編集版を執筆することにいたしました。編集版は、一部タイトルも変更され、非公開エッセイになる予定です。

4. 結論

これまでの章で主張させていただいた内容を元に、私は、「人工知能が人間の能力を超え、人工知能自身がより優れた人工知能を生み出すようになる」ことはあっても、「AIが人間のような『意識』をもつ」という意味合いでの「シンギュラリティ」は、金輪際絶対に起こらない、と結論づけています。

ちなみに、「ジョハリの窓」というモデルがあり、これは、「自分が認識している」と「他人が認識している」の二軸に基づいた「四象限」ですが、同じように、「意識が認識している」と「無意識が認識している」の二軸に基づいた「意識の窓」の四象限を、ケン ウィルバーの四象限に対応させながら、私なりに（暫定的なモデルとして）作成してみました。



要するに、この「意識の窓」が、「論理階梯」の一つ一つのレベルに存在していて、ある特定のレベルで意識も無意識も認識できていないことを、一つ上のレベルの意識（これは、当初のレベルの「メタ」となります）が気づかせることができる、というのが、北岡式認識論の結論で、これが、先の書き下ろしエッセイ「『メタ シャドウ ワーク』：神を超える道」で言及した「永遠の再帰的アセンション（RA、リカーシブ アセンション）」のなんたるか、です。

そして、機械である AI は、金輪際、絶対、「神的意識」の一部である「人間意識」の特権である「リカーシブ アセンション」を達成することはできない、という論理的帰結が生まれてきます。

そして、この「リカーシブ アセンション」こそが、機械ではなく、人間だけに与えられた、神になる可能性がある「自由性」の「神聖なる特権」です。

4. 後書き

以上が、「はたして AI が人間のような『意識』をもつことは可能なのか」の問いの観点から「シンギュラリティは、絶対起こりえない」という私の主張についての解説でしたが、いかがでしたでしょうか。

ちなみに、私は、先の書き下ろしエッセイ「『メタ シャドウ ワーク』：神を超える道」で、以下を書かせていただきました。

[Zoom チャットで、ある哲学的議論をした] この方は、Zoom で、突然、「メタがあるということは、自由意志がないことを意味します」と言い始めました。私は、意味がさっぱりわからなかったのですが、この方との「メタ」や「自由意志」の定義の擦り合わせの結果、この方は、結局は、「メタからのメッセージその他は、すべて『上 (神?)』からの『恩寵』で、人間は、ただただそれに『サレンダー (自己放棄)』することしかできないので、この意味では、人間に『自由意志』はなく、それゆえ、コーチングもカウンセリングもいっさい意味をなさなくなる」ということを主張されたいのだ、ということがわかりました (これは、私自身の解釈なので、この方の意味合いからずれている可能性もあります)。

このことにつきましては、まず、おそらく、この方は、若い頃から、「人間には『自由意志』があるかどうか」について悩み続けてこられていたのだと思いますが、私自身は、「人間にとって唯一行使できる『自由』は、『メタ』に抜けることだ」あるいは「メタ (神的意識) があることは現象界 (条件反射のみで成り立っている世界) がないことだ」とは思っていますが、いまだに、この方が「自由意志」で何を意味されているか、理解しきれていないところがあります。

その後、この方と、再度、哲学的議論をしたのですが、その際、この方は、「自由意志」の代わりに「エゴ」もしくは「自我」という用語を使ってもいい、ということに同意されました。

であれば、「現象界から抜け出すことが、唯一の人間の自由性だ」と考えている私も、この方の論点に完全同意できます。

前章で述べた「リカーシブ アセンション」は、機械にはない人間意識の「特権」で、唯一の人間の「自由性」ですが、この自由性が、神が予め決めたもうた必然性なのかどうかは、「神そのもの」ではない、「神的意識」の一部である「人間意識」では、知ることとは不可能です。

人間にできることは、「仏陀の掌の上の単なる『お遊び』」を観察することだけです。

編集後記: 本エッセイの内容に興味をもたれた方で、非公開の書き下ろしエッセイ「『メタ シャドウ ワーク』：神を超える道」の閲覧に興味をもたれた場合は、以下の私の特別メッセージのページにアクセスされて、このページから閲覧登録をお申し込みください。

<https://www.kitaoka.co/links/essays/s/message/>